［附］報告「石井方式漢字指導の実践」

―石井式漢字教育の現場―

さて、これまで言葉・文字・教育について、私の実体験を通して得たさまざまな理論を述べました。しかし、どんな理論も、理論である内は画に描いた餅だとよく言はれますから、それを実際の現場で実践してみて、その結果を観察してみることが一番大切なことではないかと思ひます。

そこで、石井式漢字教育の実践報告の実例をここに紹介したいと思ひます。昭和六十年十月十七日、東京の十文字高等学校で聞かれた第二十二回全国漢字漢文教育研究総会の第三分科会発表者として、島根県太田市の市立大屋小学校校長・江角龍夫先生が「小学校における石井式漢字指導の実践」と題して発表されたお話を、ここに再現して載せることにしますので、参考にして頂きたいと思ひます。

［小学校における石井式漢字指導の実践］

島根県太田市立大屋小学校校長・江角龍夫

【はじめに】

昭和五十一年度に出東小学校においてスタートした石井方式漢字指導の研究は、実践八年を経て「石井勲先生を囲む会」に発展し、この夏の研究会には小学校・中学校・養護学校をはじめ教育センター、県立中央病院の先生まで延べ二〇〇名の参加者があり、その地域は県下五市七郡に広がった。研究の第一年次より参画した者の一人として、以下石井方式漢字指導の実践について述べてみたい。

―【国語の基礎学力の充実と漢字指導〈第一年次の実践〉】

1、昭和五十一年度の研究主題〈島根県斐川町出東小学校〉

「国語の基礎学力の向上をはかるにはどのようにしたらよいか」

――国語科における基礎学力を見なおし、特に「読むこと」「書くこと」の指導の具体的方法を研究する――

① 主題設定の基本的な考え方

ア、子どもの「ほんとうの力」を伸ばす研究をしたい

イ、全職員が取り組める研究でありたい

ウ、研究したいことが毎日子どもにはねかえっていくようにしたい

※この研究主題の決定や基本的な考え方は足立仂校長の卓見による

② 主題達成のための具体的方策

ア、音読・朗読の力を伸ばすために

- 低学年朗読会　週一回　8:35～8:50
- 高学年朗読会　週一回　8:35～8:50
- 校内放送による発声練習　週一回　8:35～8:40

イ、漢字習得の方策として

- 書取会を週一回各学年毎に実施する。
- 満点者に賞状を与える。満点者が少ない時には高得点者より学年二割以内で九〇点以上の者に与える。

2、漢字習得状況調査の実施

昭和五十一年九月二日と三日の二日間にわたって全校児童三四一名全員につい

て実施した。新訂「新しい国語」(東京書籍)にでてくる該当学年以下の新出学年すべてについて調査。一年生は七六字、二年生は二二一字、三年生は四一六字、四年生は六一一字、五年生は八〇九字とだんだん増え、六年生は一、〇〇四字になり、調査用紙も三一枚に達した。

① 調査の目的

ア、習った字をどの程度覚えているのか

——個々の習得率、学級・学年の習得率とその傾向

イ、一字一字についての習得率

——子どもにとって覚えにくい漢字はないか

ウ、誤字傾向の分析——誤字傾向を知り、今後の指導に役立てる

② 調査方法(略)

③ 調査の集計と考察(「集計」は左及び次頁の表で)

●学年別正答率 <3年字の一部>

(No)	漢字	正答率(%) 3年	4年	5年	6年	(No)	漢字	正答率(%) 3年	4年	5年	6年
1	炭	83.6	50.0	69.8	70.4	41	急	50.9	61.1	45.3	63.4
2	屋	74.5	72.2	79.2	93.0	42	横	56.3	50.0	60.4	83.1
3	仕	89.0	79.6	81.1	95.8	43	落	52.7	51.9	47.2	88.7
4	事	76.4	74.1	84.9	95.8	44	向	72.7	53.7	54.7	62.0
5	開	80.0	63.1	71.7	83.1	45	次	52.7	53.7	58.5	81.7
6	取	61.8	72.2	28.3	56.3	46	短	45.5	37.0	37.7	78.9
7	登	70.9	75.5	88.7	84.5	47	細	69.0	68.5	71.7	90.1
8	息	67.2	64.8	71.7	69.0	48	線	49.1	59.3	66.0	83.1
9	皮	52.7	61.1	79.2	74.6	49	使	38.2	30.0	45.3	73.9
10	意	74.5	59.3	50.9	78.9	50	終	72.7	72.2	83.0	94.4

●一人当りの習得漢字数

	1年字	2年字	3年字	4年字	5年字	6年字	当該学年までの				前学年までの習得率
	76字	145字	195字	195字	198字	195字	合計習得字数 出東小	文部省読み	配当字数	習得率	
1年	28						28字	27字	78字	36.8%	
2年	69	41					110	91	221	49.8	90.8%
3年	75	119	53				247	173	416	59.4	87.8
4年	74	120	103	39			336	216	611	55.0	71.4
5年	74	120	111	68	50		423	325	809	52.3	61.0
6年	75	135	147	108	67	48	580	470	1004	57.8	65.8

考　察(抄)

●出題は原則として教科書初出の語形によったため、その漢字配当学年では問題なかったが、高学年児童にとっては読みかえの関係で、どちらともとれる同音異義の言葉(例＝指示する・支持する、想像する・創造するなど)が生じた。

※その漢字は正答にも無答にもならないように処理した。

●習得率がよくなるのは初出学年プラス二〜三年経過後である。

●一〜二年時の漢字の配当が少なく負担が軽いのではないか。

●そのしわよせが三〜四年の時にひびいている。

◎漢字の定着は初出時より二〜三年の練習期間経過後に定着するのではないかと推定される。

(資料No.1)

以上の調査、集計、考察、そして二〇ページの小冊にまとめるのに、ほぼ半年を要した。翌年石井勲先生にお目にかけると「大変ご苦労様でした。このことは私が二十年前にやったことと同じです」とおっしゃったので、不勉強が恥ずかしかった。しかし後になって考えると、この調査を自分達の手でやったことが私達なりの漢字指導観をもち、石井方式の実践に踏み切る原動力になったと思う。

習得率三〇％以下の漢字が二三七字あったが、これを「覚えにくい漢字一覧表」（実は目に触れる回数の少なかった字、もしくは教師が指導を怠った字）にして児童・家庭に配布した。そして学校でも指導した後、二月三日にもう一度この字についての調査をした。

漢字分析も計画していたが実際には習得率の低い漢字は誤答よりも無答が多く（二三七字中、二二三字、九四％）分析を中止した。

3、石井方式漢字指導法の研究と実践

石井方式漢字指導については夏休みの前から話題になり、足立校長は夏休みに石井先生をお呼びしたらと提案されたが、研究主任としては今お呼びしても態勢が整っていないことを理由に「もう少し持って下さい」と延期してもらった。

そうして出東市立図書館にあった『私の漢字教室』を借りて回し読みしたり、『石井方式漢字の覚え方』『石井方式漢字の教え方』（学燈社）を書店で見つけて勉強会を続けていたが、漢字調査の結果「漢字に目を触れる機会を多くすることが漢字を覚えることにつながる」との確信を一層強くした。そこで石井先生が提唱なさっている二つ目の基本原理「社会科用語は社会科で、理数科用語は理数科で提出し指導すべきである」……には全面的に共鳴し、実践を更に進めることにした。

即ち、他教科での漢字指導(板書して読むだけ)をより積極的に行うと共に掲示物はもちろん、学校・学級の連絡・通信プリントにも出来るだけ多くの漢字を使用した。また、児童会主催で全校の「漢字読み方大会」をしたり、漢字クイズで関心を高める工夫もした。校報を通じて保護者の関心を高め啓発にも力を入れた。

一方、読書指導に力を入れ、当時の金で一〇〇万円近くの教育振興費を全額児童用図書や教師用図書(大修館の『大漢和辞典〈十三巻〉』、小学館の『日本国語大辞典〈二〇巻〉』他)購入費にあててもらった。

4、その他の実践

ア、小学校で学習する学年別漢字一覧表を全家庭に配布掲示してもらう

イ、漢字、朗読に関するアンケート(児童・保護者)の実施

ウ、全職員による漢字指導の授業研究

エ、教師の研修と共通理解

◎研修のために使用した図書のうち主なもの

●石井勲著『私の漢字教室』『漢字の神話』『石井方式漢字の覚え方』『石井方式漢字の教え方』

●国語教育研究所編『漢字の読み書き分離学習』

●文部省初等教育研究資料第一集『児童生徒の漢字を書く能力とその基礎』

＝【石井勲先生・石井方式漢字指導法との出会い】

昭和五十一年度末の人事異動で、足立仂校長は突然隣の学校へ転勤になり、新しく稲田和夫校長が着任された。しかし、研究同人で新しく加わったのは校長の他は一人だけであり、一年次の研究態勢がこのまま続いていたので、昭和五十二年度も「国語の基礎学力の充実」という主題で研究を続けてほしいと新校長にお願いし了承を得た。当時の新校長の気持ちがよく現れた一文があるのでその一部を紹介したい。

（※次頁より二頁に亘って掲載＝著者注）

忘れられないあの日の輝き「漢字教育八年の歩み」出東小学校刊による

斐川町教育委員会社会教育指導員　稲田和夫

1、決断を迫られて

(1)嘘みたいな話だが

●心をうたれて

私は昭和五二年四月五日に着任したが、その翌日から折を見ては江角研究主任から研究経過について報告を受けた。聞かされたという表現が適切かも知れない。何となく先生方の熱意が電波のように伝わってくる気配をしきりと感じたのを覚えている。

前年度(五一年)から、基礎学力の向上をめざして国語のよみ、かき、特に朗

読を主体とした研究にとりかかったこと。中でも特に全校児童の漢字習得実態調査には私も心魂を強烈に揺さぶられる思いがした。低習得率等より、綿密な内容、考察を含めた先生方の熱意とその労苦の程に心を打たれたのである。一漢字毎に教科書に掲載された回数を丹念に調べ上げ、これと子供達の習得率との相関関係に迄研究が及んでいたからである。初発の研究段階として無類の成果であり、研究スタッフを始め全職員の熱湯のような意欲を感じた。教科書に数回しか掲載されていない漢字の定着率は極めて低いが、その中でも平素社会生活の中で目に触れる機会の多い漢字は高率であるし掲載回数の多い漢字程高率である等考察がなされていて、要は、できるだけあの手この手で子供の目に触れさせる手だてを講じてやればいいではないかということである。

●石井先生の御著書に接して

次に研究主任から「石井式漢字教育革命」を読むよう奨められた。感激した後で読むのだからそれこそ石井式漢字教育は金科玉条。本校職員の考察と全く一致する。そこで石井先生の著書は総て購入し目を通すことになった。（但し石井式を実施するに当っては、種々の問題が予想され、安易に踏みきれないものがあり、思案熟慮の日が続く。）

※そして先生は「この意欲、この研究スタッフならもう逡巡することなく石井式漢字教育の実践に踏み切るべきであると意を決したのは九月の中旬であった」と述懐されている。

教師も燃えた、子供も燃えた。精薄児も喜々として挙手している。こんな素

晴らしい研究があったのか、この子等の為にも本研究は是非推進せねばならない。私は、この素晴らしい研究スタッフを全面信頼しつつ学校運営に当れる幸福を心底からしみじみと噛みしめた。どんな障害があろうと私の責任で解決すべく覚悟を固めた。

その後の実践が全校態勢でできたのはひとえにこの時の稲田校長の勇断のお蔭である。

1、昭和五十二年度の研究主題

「国語の基礎学力の向上をはかるにはどのようにしたらよいか」

――ひとり一人の子どものつまずき意識をふまえた音読・朗読および漢字指導の具体的方法を研究する――

2、書取り採点規準についての話しあい

●三年生の子どもの字一〇〇字についての各自の採点を検討し採点規準について話しあった

●協議の結果申し合わせたこと

［指導の時は一点一画はもちろん、とめ、はね、つく、はなす等について厳しく指導するが、書取りテストでの採点は、子どもの発達段階に応じて許容範囲を広げ、原則として下記以外の字は正答とする　・画数の過不足　・反対方向へのはね］

3、石井方式漢字指導法の全面的実践

石井方式漢字指導の二つの基本原則のうち、一つについては(社会科用語は社会科で、理数科用語は理数科で提出し指導すべきである)すでに第一年から実践してきていた。

しかし、肝心の国語科においては、書取り会のあり方をはじめとして従来のドリル中心の方法がやはり大勢をしめ効果がなかなかあがらないでいるのが実情であった。それどころか、書取り会一つをとってみても私達がねらっていたことと逆にかえって漢字嫌いな子どもをつくっているのではないかという危惧さえ感じ始めていた。

そこでいろいろ話し合った末にこの際抜本的な指導法の改善をしなくてはということになった。それはもう一つの基本原則(社会一般に漢字を用いている言葉は相手がたとい小学校の一年生であっても最初から漢字で表記して提出しなければならない)の実践より他はないということになった。

「とにかくだまされたと思ってやってみましょう」と提案し、いい悪いはその反省にたって決めようとの合意を得て、二学期の最初の単元からいわゆる「漢字貼り」の実践を始めた。

①「漢字貼り」の実践

国語教科書のかな言葉を漢字表記に改めるため次の方法をとった。

ア、かな言葉の上に漢字言葉を印刷した小片を貼りつける

イ、かな言葉のわきに漢字を書き入れる

（資料No.3）

漢字の選択範囲についてはいろいろな意見が出たが、結局普通の辞書に表記してある漢字はすべてということにし選択は担任の考えによることにした。

一単元の漢字貼りを終えて反省会を開くと次のような意見が出た。

●予想していたより楽しく早く貼ることができた

●よくできる子は貼りながらすぐ字を覚え、貼り終わった時にはそのほとんどが読めるようになった

●子どもがよく覚える字は、字画にあまり関係がないようだ

●文の前後の関係からその漢字を読んでいる

●漢字になおすとかえって楽に読めるという子が多い

●まちがえて読む部分はかえって平仮名のところである

何よりもあれほど危惧していた教員が、予期以上の成績に気をよくし、今学期末まで続けてみようという提案に全員が賛成した。

普通の辞書に表記してある漢字はすべて「貼り漢字」として読ませようということで実践を続けていったがそのうちだんだん問題点がでてきた。即ち、学年によって表記する漢字の選択がまちまちであること、普通に使用する範囲をこえると思われる漢字まで「貼り漢字」に選ぶ事例ができたこと(例、綺麗、何処から、頂戴、攫、微塵子等)である。そこで当分の間「当用漢字音訓表」「公用文の書き表し方の規準」

等を参考にし、各学年毎に研究し後々いい機会に決めることにした。

※最終的には当用漢字の範囲内でということに落ちついたが個人的な好みまでは制限しないで自由にした。

ここまでは比較的詳しく述べてきたが、それは私達が自由な雰囲気の中でお互いの共通理解をはかりながら、全校態勢でこの研究実践に取り組んできた経緯を知ってもらいたかったからである。なぜならば、このようなスタート、このような経緯が以後一〇年にわたって実践を続けてきた原動力になっていると信じているからである。

このあとといよいよ石井先生に御指導をいただくことになるが、三学期になると早速出東小学校において下さった。そして私達は「漢字教育」に大きく開眼し、単に漢字の指導法ばかりではなく、教育全般について得がたい御指導をいただいている。

以下の教育については要点だけを述べることにする。

4、青森県弘前市立船澤小学校の視察

①視察月日＝昭和五十二年十二月九日(金)

②校長・児童数＝花田弥郷(やさと)・三二二名

③研究歴＝漢字教育をはじめて八年目、当時石井方式漢字指導法を取り入れて全校態勢で研究に取り組んでいる全国唯一の学校であった。

④花田校長の信念＝やっていることは真理である。学校というものは子どものためにあり、理論なんかはだめ。言語能力は一切を支配する根元である。

⑤教わったこと＝貼り漢字・解字指導・漢字カルタ・漢字環境の整備・石井方式に

ついて・保護者の協力、他。

5、第一回目の石井先生の直接指導

①日時＝昭和五十三年二月二〇日～二一日

②指導内容＝

（二月二〇日）9:45～10:25　一年生全員に対しての漢字指導

10:30～10:45　全校児童に対しての講話（私の少年時代）

10:50～11:25　特殊学級児童に対しての漢字指導

11:45～12:15　六年生全員に対しての漢字指導

13:30～19:00　石井先生を囲んでの校内研修会

（二月二一日）10:00～12:00　幼稚園児に対しての漢字指導と保護者への講話

14:00～16:00　町内全職員に対しての講話と幼稚園児の指導

この年の研究紀要「あとがき」に私は次のようなことを書いている。

●考えてみると、石井先生に御指導を受けたらという話がでてから、石井方式の実施に踏み切るまでの一年間は、一見無駄のようではあるが、実は全職員が共通理解にたって全校態勢で取り組むことが出来た大事な孵化期間であったことを今になって気づく

●それにしても、日をおいて考えるたびに、石井先生がよくもこの遠隔の地に来て下さったものと同人一同感謝にたえない

いずれにせよ、この二日間の研修で私達は今までの実践についての自信をいっそう深め、より鮮明になった具体的方法の実践をつぎつぎと進めていくことになっ

た。

Ⅲ【石井方式漢字教育の実践〈三年次以降の実践より〉】

1、漢字貼り〈二年次の実践参照〉

2、漢字朝礼による解字指導

●中・高学年を対象に週一回十五分ずつ学年毎に実施

●指導者・記録者は輪番にあたる

●はじめての解字指導〈昭和五十三年度〉

中学年の例――研究紀要〈三年次〉より――

［はじめた日が母の日の直後であったので母という字からはじめた］

（五月十九日）

○母　女に乳房を表す印を加えてできた字

○父　／と又で作られた字。／は斧の意。又は手の印。斧を手にして働く男を表した。働く男の意から男親の意になった

（五月二十六日）

○右　手の形と口でできた字。食事の時、口にいく手は右手から

○左　とエで作られた字。エは工作の時に使う定木。定木をもつのは左手なので「ひだり」を表した

（六月二日）

○友　二つの手が交。握手する仲のよい友だちの意味

○取 ○受 ○雪 ○筆 ＋竹（説明略）

※手のつく漢字からはじめたが三回目になると子どもの目の輝きがすっかりかわり、以後はもっと教えてくれとくいついてきた。その後、数校で同じやり方でやってみたが、例外なくいっぺんで漢字が好きになってくれた。

「手シリーズ」が終わると「足シリーズ」に発展していったが、石井勲先生著『連想式漢字記憶術』『漢字の覚え方』という恰好のテキストがあり、教える方も毎週の朝礼を楽しみにするようになった。

3、お話による漢字指導

●低学年を対象に週一回学年毎に十五分間ずつ実践。

●直観的に漢字を覚えることのできる低学年の特質を生かし、お話を楽しませながら、さりげなく漢字を板書（または漢字カード）することによって、漢字をしらずしらずのうちに覚える。

4、特殊学級児にも漢字を！

●特殊学級児と漢字――暮らしの態度が変容してきた子どもたち――

〈都楽寛子教諭の実践〉

※『石井勲の漢字教室　全9巻』〈双柿舎〉の別巻『母と子の実践教室①子どもはみな神童』の中に紹介されている。

5、音読、朗読の力を伸ばすため、詩の暗誦にも力を入れた

〈取り上げた詩〉――「漢字教育八年の歩み」出東小学校刊より――

かえるのぴょん(谷川俊太郎)田んぼにて(山村暮鳥)ならの若葉(大木実)山頂(原田直友)こわれた水道(谷川俊太郎)おしっこのタンク(阪田寛夫)夕やけ雲の空の下に(百田宗治)かたつむり(リュー・ユイ)お月夜(北原白秋)青空のすみっこ(谷川俊太郎)土(三好達治)柿の木(浦かずお)学校がえり(浦かずお)コスモス(佐藤義美)花になりたい(八木重吉)木犀(浦かずお)紙風船(黒田三郎)ねずみはチュウ(鈴木敏史)草にねて(北原白秋)雨(八木重吉)永遠の母(深尾須磨子)いぬがあるく(まどみちお)春の歌(草野心平)雲(山村暮鳥)とうもろこし(まどみちお)落葉松(北原白秋)千曲川旅情の歌(島崎藤村)雨ニモ負ケズ(宮沢賢治)とまと(荘司武)はぬけの子(高村喜美子)イナゴ(まどみちお)五十音(北原白秋)かとりせんこう(矢崎節夫)山のあなた(カール・ブッセ　上田敏訳)卻(西条八十)海の若者(佐藤春夫)白い雲(八木重吉)雪(三好達治)サーカス(中原中也)初夏(三本露風)蔵王の山に(佐藤さち子)風(巽聖歌)道程(高村光太郎)ぼくのボール(竹久夢二)子守唄(若山牧水)ゆき(草野心平)ふるさと(室生犀星)ビスケット(サトウ・ハチロー)ことばあそびうた(谷川俊太郎)

〈その他〉

漢詩―春暁、偶成(少年老い易く……)、春望など

古文―竹取物語、平家物語、枕草子

論語―学而時習之　他

俳句―芭蕉、蕪村、一茶、原石鼎など

短歌―石川啄木、若山牧水、正岡子規

他に、百人一首、愛誦和歌発句撰、俳句かるた

Ⅳ【広がる「石井勲先生を囲む会」】

昭和51年度にはじまった出東小学校における石井方式漢字指導の実践は、昭和52年度から56年度までの5年間にだんだんと発展充実し大地に根を下ろした。

稲田和夫校長を中心にした17名の研究同人は心を一つにして研究を楽しみに子どもの成長を喜んできた。昭和57年度になると校長、教頭をはじめ研究同人もす

昭和六十年度「石井勲先生を囲む会」日程

	24日（土）	25日（日）	26日（月）
午　前 9：30 〜 12：30	講座 1 あなたはどんな漢字指導をしていますか？ 〜戦後の国語政策と漢字教育〜 講義　石井　勲先生		講座 4 これだけは知っておきたい漢字の教養 ○書取りの採点，字体，音と訓等 〜「漢字の常識」をテキストにして〜 講義　石井　勲先生
午　後 1：30 〜 4：30	講座 2 だれにでもできるやさしい漢字指導法 ○石井式漢字指導の実践報告 ○映画 「石井先生の漢字指導の実際」 指導　石井　勲先生	講座 3 かなは漢字より易しいか？ 〜漢字で育つ特殊学級の子ども達〜 ○特殊学級における漢字指導の実践 指導　石井　勲先生	講座 5 子どもが喜ぶ漢字の成立ち 〜中学年から始めたい解字指導〜 「連想式漢字記憶術」をテキストにして 講義　石井　勲先生

っかり入れかわって、一年次の同人はひとりもいなくなってしまった。しかし研究・実践は中間幸夫校長にひきつがれ日常化されて続いた。

一方、出東小学校から転出していった研究同人は、周辺の学校で個人的に実践を続け、ことあるごとにその効用を説き実践をすすめたので、毎夏湯の川温泉で開く漢字講習会に出席する先生の輪は年毎に拡がっていった。

昭和五十九年度からは旧同人の有志が元校長の稲田和夫先生を会長に推して「石井勲先生を囲む会」を結成。漢字講習会を続けることにした。

今夏の会は下記のように八月二四日～二六日に湯の川温泉「湯元湯の川」を会場にして開いたところ、県下五市七郡から延二〇〇名の参加があり、校種も小学校、中学校をはじめ養護学校、病院（小児科の先生）等に拡がってきた。

※特に二日目の特殊学級の指導では、お母さんに連れられて参加した、言葉がいえないR子ちゃんが、石井先生の御指導によってたくさんの漢字カードを拾ってみせてくれたので、参加者一同先生の言に間違いのかいことをまのあたりにして感激した。

【おわりに】

以上述べたように、昭和五十一年度にスタートした石井方式漢字指導法は、だんだんと県下各地の学校に拡がってきているが、この会に参加した先生たちが同じように口にするのは「子どものために」と思って参加したが、何より「自分のため」になったということである。

三年次の研究紀要の編集後記に私は次のように書いたことを思い出す。「また、この研究に取組んでよかったという同人の皆さんの声を時々耳にする。近頃事ある毎

にすぐ辞書を引くようになったという話をちょいちょい聞く。いってみれば、この研究は子供たちのための研究であると同時に、私たち自身の研究であったことに、今になってあらためて思い当たる(s 54. 3. 20)」

私たちがかつて感じたことを、参加して下さった先生一人ひとりが同じように感じて下さるということは、何とうれしいことであろうか。これはまた石井先生のお話がそれほどすばらしいということである。

実際、先生のお話は「漢字教室」といいながら、教育かくあるべしという教育観であったり、また人としての生き方にまで及ぶ魅力に富んだものである。

そして、また一方的に教師の努力精進を説かれるのではなく、むしろ教師の教え過ぎを戒め、もっと横着して最少の努力で最大の効果をあげることを考えなさい。そのためにはもっと子どもの伸びる力、生きる力、生命力を信じなくてはならないと力説される話を聞いた直後に、明日からでもやってみようという意欲がわき、実践にも結びつくお話である。

かつて三十年近くも子どもの練習効果にだけ頼るという情けない漢字指導しかしていない私であったが、石井勲先生に出会ったのは幸運であったと思う。今でも若い先生が、明治以来の旧態依然とした漢字指導をしかも営々として続けているのを見ると、せめてもの罪ほろぼしとして石井方式漢字指導法のすばらしさを紹介し実践をすすめたいと思う。